

會



報

1965年5月

239

日本山岳会

マナスル以前

西堀 榮三郎

何事も最初にやるということにはいろいろなひとびとの親切と協力と業績の上にも可能となるものである。わたしが最初にマナスルの登山許可をとりネパール入りをしたときにも、そうであった。

首相に面会して、「日印合同登山学術探検隊」の提案をし、彼の賛成を得た。しかし後になって外務次官から、「合同探検隊は、時期尚早」という表面上の理由で断られ全く遂行に暮れてしまった。

「マナスルをねえ」と提案したのは今西君であった。参考文献は、木暮さんが「山岳」に書かれた、ヒマラヤの紹介文と、藤木さんから借りた、大きく重い英語のNEPALという本であった。それも読む暇がなかったので飛行機の制限重量の中へ無理におしこんで現地で読まねばならないことになってしまった。当時まだ日本はマックアーサーの支配下であったので、外国に出ること、外価を手に入れることも至極困難であった。幸いわたしに賞を下さったデミング博士がインドに旅行しておられたので、彼から招待状と学術会議の当時の亀山会長の御了解と、そして毎日新聞社の好意により、UPA社の臨時記者になることによってやっと木原先生のお供ができることになった。

そのとき、カルカッタの植物園長の紹介でラフルというインド人であった。彼は外国隊のリエゾン・オフィサーとしてしばしばネパールやチベットに入っていたので、ヒマラヤ事情に詳しく、ネパール政府へ直接アプローチすべきこと、その方法などをつぶさに教えてくれた。クリシュナ君あての竹節君の紹介状もそれに一役買ったものである。ダージリンのヘンダーソン夫人のところへわたしを連れて行って、シェルパを全部広場に集めひとりごとにはじめての日本人を紹介してくれたのも彼であった。日本のヒマラヤ登山史は彼の協力なくしてはこんなにかがやかしいものにはなっていなかったのではなからうか。

まず第一の仕事はマナスルの情報を得ることであった。しかし誰もマナスルという山の名前を知るものはない。地理の先生さえも知らなかった。ゼネラル・カイザー邸の立派な図書館でサー・ベイ、オブ、インディアの地図の中にマナスルの地名を見つけるまでは、そんな山のあることをわたしも疑ったほどであった。それからその地図でコイラ首相、トリブナ王、カイザー、ラナなどの要人にマナスル登山の許可をねがった。その人達は、今迄聞いたことのない八千米級の山を発見した同色の日本人に（これはすこしオーバーだが）この山が登れるまで許可をあげよう、と非常な好意を示してくださった。

近藤、横、両名著
会員の紋章
成瀬 岩雄

山岳会の「会報」にまで、叙勲の宣伝とは、随分ピンと外れの奴だと思われるかも知れないが……山岳会などは凡そ位階勲等には無縁のものとはかり思っていたけど、今度、我々が日頃そのお人柄からも大先輩として尊敬措く能わざる御両人が叙勲の対象になられたとなると、勲章なるものの価値というか値打ちというか、それをあらためて見直さざるを得ない様な気がするのが僕の偽らざる心境なのだ。

残念ながら勲章そのものは人間ではないので黙して語らないが、これが人間でもあったら当然御両人に対して「私の如き者が貰っていただいて……」と辞を低うして恐懼、自らの「格」が上った事に感激して貰いたいものだ。

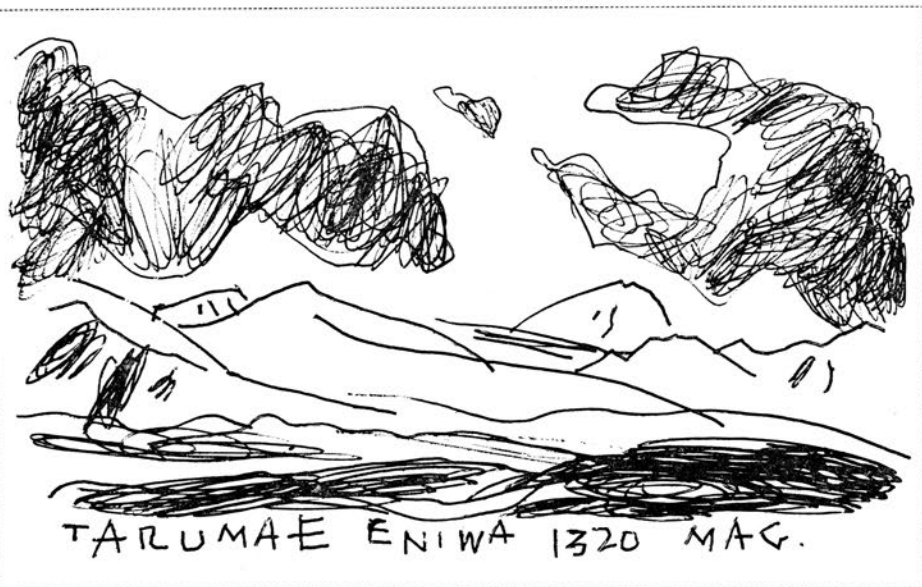
大体、位階、勲章などというのは告別式や墓石によく見受ける「看板代り」みたいなものだと思つていた僕は今度御両人がその対象となったとなると御祝詞は御両人に申し上げるよりむしろ「勲章」という「仮空の人物」に申し上げたいくらいだ。

何れにせよ、一応、会としても人並みに年末筆御両人に対して衷心より御祝詞を申し上げたい。

(四〇・四・二九)

J
A
C

絵と文 串田 孫一



私のJACのバッヂは、友人からずっと前に誕生日に貰った木の小函に入れてあります。この函に

はGAC・MB・IUACそのほかいろいろの山岳会のバッヂが入っています。GACはかって私がつ

とめていた外語大の山岳部、MBはメイン・ベルク会、あとのものは私は会員ではないのですが、何かの記念に頂いたもので、これを胸につけて歩くわけには行かないものです。もう一つ、今は通用しない、しかし再び役に立つようなことがあっては大変なバッヂがあります。帝国在郷軍人会の徽章で、今に物好きな人が大金を携えて売ってくれと来るかも知れないと思い、それまで捨てずに置くつもりです。

私のJACの会員番号は四二五で、もちろん戦後に入会させて頂いたのです。紹介者の一人今村信吉は私の叔父で、今はもうこの世にはおりませんが、七十の年の初冬に、戦死をした従兄の残して行ったピッケルをもって西穂高へ行きたいと言いつつ、十一月末に二人で出かけたのですが、その時に私をJACに入会させてくれたのです。

その時のことは数年ほどして「老人」という題で拙い文章にいたしました。深い雪の中を歩かせ、ずい分辛かったろうと思います。

古いことを今思い出しました。私が東京高校の学生のころ、虎の門の晩翠軒のビル（編者注、不二屋ビル）の中にあったルームにずい分通い、外国の山岳会の会報を見せて頂いたり、大学の山岳

部の部報によって、登りたい山のことを調べたりいたしました。必要になるかも知れないことを書きとめたり、図を写したりしたノートは何冊にもなりました。

北鎌尾根へ出かける前にもそのルームへ何度も通い、あそこは山の勉強部屋であると同時に、私の山の夢をふくらませてくれる部屋でした。その北鎌尾根に登った記録を、私は自分の学校の山岳部の部報に載せました。何しろ四十部か五十部ぐらいの、騰写版刷のものですから、当時の山岳部員を訪ねても、持っている人は少ないと思います。

話は少々それますが、半年ほど前にその部報がある古本屋に出ているという知らせをもらい、さっそく買いに行こうと思いましたが、呆れるほど高い値段がついていてというので、ばかばかしいと思つてやめました。それでも自分の三十年も前の山の文章をのぞいてみたくなって出かけますと、三日ほど前に売れたと言われ、さあそうなると、いったいどんな人が買ったのか気になって仕方ありません。結局いまだに分らないのですが、その頃の仲間で、同じ部報に何か書いている者の一人ではあるまいかと想像しています。

私は自分でそれを望んだわけではありませんが、殆んど毎日、何時間かは原稿紙に向つて何かを書

いて、それで生活を立てているような人間になってしまいました。考えるところがあって長いあいだつとめていた教室へ出かけて行く生活もやめてしまいましたので、本気になって文章を綴る仕事のことを考えまないと、今にひどい目にあうかも知れません。

山登りさえ出来ればどんなに貧乏したっていいようなものですが、その山が思うように歩けなくなりますと、そうも言っていられず、不惑の年を十年前にうっかり通り越して、今ごろになって感の道に踏みこんでしまいました。

山を歩いて感い込むことも得意ですけれど、平素の迷いは、山歩きにもひびいて、晴ればれと旅に出られなくしてしまいます。

一年以上腰を痛めて、山歩きを止むを得ず中止していましたが、久し振りに山靴を穿いて一日敷を歩いてみましたが、少しは歩けそうなことが分り、この次にはJACのバッヂをつけて出かけることにします。

私にとって、それはお守りのような役目をしていきますので。

(四〇、四、二五)

◇小集会その他

五月十九日(月) ルーム

山の今昔

神谷 恭氏

六月二十九日(火) ルーム

登山談義

藤島敏男氏

六月十九日(土) 六義園

有志閑談会

高野君に関する誤謬二件

武田久吉

高野鷹蔵君が昨秋九月二十八日易簀されて以来、そちち追悼文が掲げられ、少くとも三回を下らないと思うが、私が一読して誤りと思った点について、真実の事

山の雄大さや壮烈さ、そこへ登る人の喜びや困難といふやうなものはなかなか描きがたいにちがひない。どんなによく描かれてゐても實際登った人にとっては常にかもの足らぬやうな気がするかもしれない。

その点山の風景は、その記録的な意味と瞬間的な景観とリアリティから言つて寧ろ写真にとつた方が適当かもしれない。山岳写真家としては内外ともに沢山の優れた人々を数へることが出来るやうである。

山の画家と言へば十九世紀後半に出たイタリアのジョバンニ・セガンチニを誰れでも思ひだす。彼は一生をアルプスの山中に送つてその風景ととり組み多くのタブローを制作した。私は倉敷の大原美術館で「アルプスの真昼」といふ彼の傑作を見たが、彼の絵は絵葉書などにもなつてゐるから誰れでも知つてゐるし、それほど一般に普及してゐる。

柄を記しておくのも無益ではあるまいと思うので、敢えて筆を執ることにした。

その一は、本会「会報」二三五号二頁最後段の記事は、大正十二

山の絵

中河与一

てゐないのかもしれない。

フランスやアメリカの画壇でも山岳を描いた絵といふものを寡聞の私は知らない。印度のミニャチュールには山がよく出てゐるが、それでも何処何処の山といふやうなものではない。

私が今までに見た山の絵では足立源一郎氏の槍の絵や、曾宮一念氏の富士山や八ヶ岳の絵が印象に残っている。それから駐地梅太郎氏の版画、それは何時

年九月一日の関東大震災で被災の結果、高野君の頭髪が白髪したような感じを讀者に与えるが、高野君が白頭翁となつたのは、それより遙か前で、多分大正七、八年頃、脚氣を患つた時、アンチペリベリンの注射をした結果だと、本人が私に話したのだから間違はない。

も山のキャリアを思はせるやうな深味をもつてゐた。足立氏の絵はリアリティを重んじたもので、山の層々累々とした重なりや深さが実感をもち迫ってくる。曾宮氏の作品には荒っぽい山肌の上に必ずと言っていいほど奇想天外の雲が立ってゐたり、横にはつてゐた。私はそれらを見ると山への誘惑を感じ、心の躍動を覚える。一種の近代感覚をもつた山の風景と言へるかもしれない。大観や梅原竜三郎や林武もよく富士山を描いてゐるが、あれは日本人の嗜好に投ずるものにちがひない。

北穂高小屋の小山義治さんも山の絵をよく描かれるやうで、志賀高原の宿で、北穂の第一尾根のフェースを描いてゐるのを見た。これはアマチュアの絵であるから勿論プロの大家達と同じに論すべきものではないが、山への追及を常に試みてゐる人の絵として私は興味を覚えたのである。

その二は、「山岳展望」五・六合併号に載るところの、熊原政男氏筆の「高野鷹蔵氏追悼」中、明治三十七年に、「はじめて鳥水や高頭氏に接触」は明治三十八年の誤りで、これは私が度々そちちに書いたり話したりした通り、明治三十八年の一、二月頃、鳥水氏を山崎紫紅氏の紹介で訪問し、高頭氏にはその年の七月七日に、小島氏の紹介状で面会したことは、私が「岳人」第二〇五号に書いた通りで、寸分の間違いはない。

本年一月二十一日附で山崎安治氏から私あての書面が来た。

熊原氏からの日附のない書面が同封してあつた。それによると、これは旧蠟に認(した)められたものと推定出来るが、熊原氏は山崎氏から贈られた「日本山岳会会報」第二三五号を見て、それには高野君と私が同道ではじめて鳥水氏を訪ねたのが、「明治三十八年二―三月頃となつてゐます」と言われるが、私は「一月か二月頃」と書いて、決して「二―三月頃」とは記していない。

斯様なことから、いろいろな間違いが、思いもかけず潜入するのではあるまいか？

伝記などを書くとする人達は、年代にも細心の注意を払わないうと、子が親を生むやうな間違いが生ずるものである。

序でいう、熊原氏によると(前

記「山岳展望」一九頁、木暮理太郎君は、小島君と同年の、明治六年の出生だとある。

然るに「日本山岳名著全集」第二巻一六〇頁には明治七年十二月としてあり、同書二九六頁には明治六年十二月とあつて、その何れが正しいのやら判らない。私は元来友人の年齢など気にしない質なので、尋ねたこともなし、聞かせられても覚えていないから、こんな時に私の記憶が一向役に立ちかねるのは遺憾である。

・編者記 木暮理太郎氏の生年は明治六年十二月二十九日、酉年の生れであると友枝夫人からのご回答があつた。

なお、甲州金山平の木暮翁碑の碑文には翁の生年を明治七年と刻んであるかに聞いたが事実とすれば訂正の必要があるう。

本号 目次

- ・マナスル以前
- ・近藤・横商名譽会員の跋
- ・J.A.C.
- ・山の絵
- ・高野君に関する誤謬二件
- ・上信越あちこち
- ・天保時代の豊後絵図から見た九重・久住山
- ・大正九年三月の立山スキー行
- ・沢とイワナとオヤジ
- ・誘われた山のぼり
- ・八甲田山・鹿内翁の計
- ・図書紹介
- ・一人ぼつちのヒマラヤ山旅と随想
- ・故人の手紙
- ・高野・高頭・西岡氏
- ・一九六五年度通常會員總會
- ・一九六五年度東京支部總會
- ・会務報告

上信越 あちこち

藤 島 玄

上信越高原国立公園の登山集成

図を作るようになって、未踏のコースを歩いてみて、地名がわかれ下越地方人に解釈しにくいことで、どう地図に記載してよいか迷った。

そこで感じとったままの地名談議を記して、各氏のご叱正を願うものである。

谷川岳のマチガ沢。伝説に曰く清水峠の街道で、市がたち町がたち、物資交換、文化交流の場であったという。一ノ倉沢はいいとして、マチガのガを、なぜケを当てないのか。至仏岳のお隣りにススケ峰がある。ススは錫で銚子の古語で、スズダケでも、スモッグの煤でもない、と武田先生が教えて下された。そうだとすると、マチケ沢と記載しないと不公平だ。

至仏岳が沢ッ沢が起源だとすると、もっともらしい至仏は何処へ行くかだ。沢沢、湯沢、濁沢が各地にあり、この間に入る助辞の「ノ、ツ、ケ」などが問題である。促音に漢字を当てた一例としては飯豊連峰の赤津山がある。これは赤ッ沢が上へあがったもので、もとは赤沢である。

地図「四万」に湯蔵山があるが、蔵はソウ、ゾウの当字で、ゾウは沢の詰ったものだ。ひどいの

に湯蔵沢とある。

岩管山に笠法師山がある。法師はポッチで、西行法師が笠をどうこうしたと無関係だ。ポッチは尾根続きの山の頂き、カッチは頭（カシラ、アタマ）は沢の突き上げ、同じようだが、越後の熊狩師はこれを使い分けている。

谷川温泉から赤谷川上流にエラクボ沢、エラクボゼン、エラオトシがある。エラは何んだらう。鯉か刺か、どちらにしても窪と関連がない。日本海岸では魚を、特に昔は鮭を魚の代表として「ヨオ」と云った。新潟では現在も「魚釣竿」といっている。山地では岩魚であったのであろう。それを、ヨオ又はイヨと云ったのを、イヨと書く問題だ。ひとつ誤植があるとイラになる。最初のガイドブックにそうなると以下同じで、イラオトシ、イラクボとなる。これを、イオ又はウオに戻せばウオオトシ、ウオクボで明瞭となる。

ウオ、ヨウ、イオに似たのにユウがある。幽ノ沢、エビリユウ、御前ガ遊、佐武流、嘉平興とみな元は、岩穴、洞窟をさしていて、泊り岩屋のある沢の名が、時には上って山名にもなっている。岩穴や洞窟を昔の文人が岫をあてたのであるまいか？ そうだとすると、

ユウは本来、シユウで漢字を当てると岫である。シユウがリュウ、ユウ、ヨウなどと転訛したのであるが、もとはひとつである。

白砂山は、シラスかシロスナか、五万分地図で解決がついている。これもスルス、岩洞とチャンと記載してある。スルスは磨臼の約、磨臼の形をした岩屋のある川、それに近似の発音に当字したので、シロスナではない。臼で磨ったから白砂（シロスナ）です、ではまるで落語の落ちです。

佐武流は如何と、さらば、流を離すと前記の岫で岩屋、問題は上のサブだ。水声のザブの聞える岩屋か、寒い（サブ）の泊り岩屋か。まだある。エビが誤植のユビ峰となり、五本木が五宝木と嘉字を当てたり、赤土居が、本来は赤種山であったりだ。

武田先生に、ナラズ山を「鳴ラズ山」とされる。「鳴」をご教示頂きたいものである。

ナラズ沢に似て、是か非か、巻機山の登川源流東岸にナルミズ沢がある。このナル水は富士の鳴沢と反対で、ナルイ（ゆるい）水の流れる沢だと清水部落で聞いた。漢字を当てると緩水沢となる。問題は激しい水音の鳴る沢とするか、緩傾斜の滝もない沢とするかから、おそろべしだ。

△武田久吉附記▽

会員藤島氏から興味深い投稿があったから一応目を通しては、という編集者からの申出であったので、小暇を偷んで通読して見た。

藤島氏が「大急ぎで走り書きしました」というとおり、御本人にはよくおわかりのことであろうが、所々意のつくさぬ点があるらしく、理解いたし難いこともあるが、私なりの解釈で、一言附記させて頂くこととする。尾瀬の至仏山の名は、可なり昔の文献にも見えるようである。これは今いう「ムジナツツアワ」を、上州でかそれとも檜枝岐でか、岩石の色から、「シブツツアワ」と呼んだその上半が山の名となり、それに「至仏」と当字したものだ、これは曾て田辺和雄君が何処からか聞き出して来たことである。

次に「エラクボ」であるが、藤島氏は鯉か、刺かと疑問を發して居られるが、これは銀山平や藤原あたりで俗称する「エラ」で、標準名「ミヤマイラクサ」。それが茂る窪なら「イラクボ」訛って「エラクボ」ということになる。

山形県や秋田県あたりで「アイコ」と呼ぶもので、新芽は一流の食品であり、成熟した茎からは、良質の繊維が採れる。

利根川の上流地方に「ユウノサワ」とか「イタユウ」などの地名がある。これについて曾て「山岳」（第十六年第三号一九一頁）

に書いたことがある。

「ユウは本来シユウ」で、漢字を当てると「岫」であるという藤島氏の説は面白いが、この方言「ユウ」は「シユウ」から転訛したものだという意味なのか、その辺が判然しない。

藤島氏が、茲で「佐武流」を持ち出されたことは賢明である。あの沢にある熊狩の泊り場となる洞窟（リュウ）は甚だ寒いので「サブリユウ」と名づけたのだと聞いた。この「リュウ」は「ユウ」から、語調の関係で転じたものに相違ない。

清津川の上流で、東からセバト川が合流する少し下流に、西から流れ込む沢を「ナラズノサワ」という。その源流の發する二六五一・七メートルの三角点のある峯を「ナラズノアタマ」と呼ぶ。これは曾て赤湯で聞いたところであるが、「ナラズ」は「鳴らず」である。

「鳴る」は音を發する意であるが、茲では寧ろ「ドナル」意と解して宜しからう。この沢に入った場合には、どんなてはならぬのである。あいにく、何故にと、常にか、それとも雪のある頃とかのある季節に限られるものか、を聞き洩らした。多分は熊狩の頃に、合図のために大声を發すると、ナダレが出るから——、とでもいうのなら合理的であろう。（二月二十日）

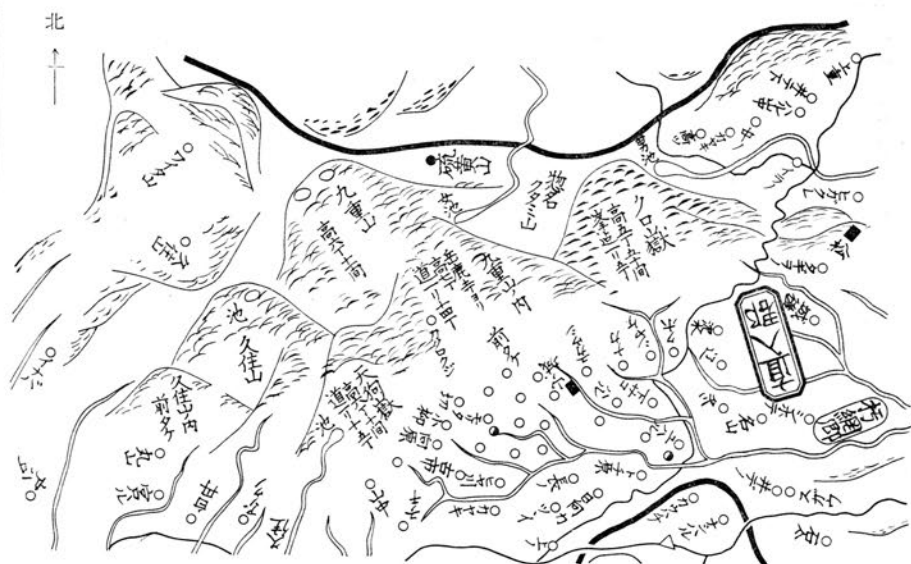
天保時代の豊後絵図から見た

九重・久住山

橋 本 三 八

阿蘇・九重の横断道路完成に際して、この間から阿蘇国立公園の名称に、九重か久住を編入するこ

とで、一時火の手を揚げて筆者もつい弥次つてみたりした例のくちう問題。その後どうなったのか火



＝豊後国大絵図 (部分縮写)＝

天保 13 年 (1842) 8 月刊

が消えたように、どこからも情報は入って来ない。

察するに、県内のことであり、これが大きく政治問題化しても、我が家の家庭争議のようなもので、あまり人ききもよくないし、また一方識者からすれば、触らぬ神にたたりなしで、意見はあっても、黙って視ている方が賢明という態度で、このところ休戦の状態にあるのかと思っている。

しかし大分県は来年は国体担当で、くちう山も山岳部門の一部に入ろうな噂も聴いている。そうならば全国から岳人を迎えて、この同称異字の山名は当然疑問を持たれること必定。また岳人以外にも、国体関係の多数はそのついでに、九重観光に足を伸すだろうが、そうしなければ共それまでには問頭を片付けて置いたが、よくはあるまいか――

くちうの山に勤めて居ると、ついこの問題に触れる機会が多くなり、いらぬ口をたたくので、これも関連があるかも知れないという親切心からと思うが、先日山岳会の古沢さんから、珍らしい絵図が送られてきた。それは「天保改正・豊後国絵図」という古いもので、私はそれを開く前に、豊後国の図となれば当然くちう山が出ている筈で、興味をもって第一にそこを目をつけた。古沢さんはまた、絵図にあるくちう山の部分を別に複写したのも同封されていたの

で、虫の食ったボロボロの絵図では判り難いところがはっきりとした。(カット参照)

それには、中心のいちばん高い位置に描かれているのが九重山とあり、頂上附近には二つの池の図が書き込まれてあり、その線の右には硫黄山が記入され下に女池とある。九重山の下部に続いて久住山。これにも池がありこれには池と字が入っている。その下部の山は久住山の内前タケとあり丸山というのがある。そして久住山は九重山の左側にも書き込まれてある。その隣にワイタ山。中央の九重山、久住山と三つ列んだ山の線から右側には惣名タミ山その隣は九重山の内と書いて岳麓寺ヨリ高七丁、道一リ十四丁と書かれ横に天狗岳があり池が記入されている。(傍線のところは絵図に記入のままだの文字)

大体以上が「くちう山」の部分で、「複写」もその部分である。現地勢と比較してはあまりに大雑把な絵であるが、全然うそ画とも言えない。素朴で微笑ましい絵図で、その時代こんな絵図で登っていたとしたら羨ましい次第である。なおこの「豊後国絵図」には欄外に神社、仏閣産物が紹介してあって、豊後の国のめばしい社とか寺のうちに猶鹿御寺(猶は現在狼になっている)はあるが、有名なはずの法華院が書かれてない、

(九重問題に大きな波紋を投げた九重山記を蔵している法華院)それから猪鹿御寺の下に九重山と記入してある。寺は昔から久住町にあったというところから考えると、上宮の意味と思われ、そうすると、上宮は御池の側で、絵図の九重山の内とある天狗岳の下に書かれている池に該当する。なほ上宮は法華院と共同であったと現在謂われていることからすると、当時は法華院はそれほど知られていなかったことになる。

以上「絵図」と九重・久住問題と結びつけて考えると、現在の両町の論争の根拠に多少の相違はあるが、総称をどちらの文字で決めるかこの絵図では不可能で、当時は適当に使い分けていたとしか思われれない、とすれば、現在と同じこととて、この絵図でもくちう山名問題とはとけませんというほかない。なお、この「絵図」がどこまで信頼出来るものか、他にこれ以上詳しい地図もあったのではあるまいか、くちう問題では第一人者である大分県庁の加藤数功さんに一度会って「絵図」のことと一緒によく訊いてみたいと思っている。なお「絵図」の奥付というところには左記のように記入してある。天保十三年八月出版 延宝三王寅八月出版 西海豊島隠士。日田滴々軒浩水蔵版。取次別府本町 米屋礼蔵。製本 大阪心斎橋筋安土町 加賀屋善蔵

大正9年(1920)3月の 立山スキー行

☆

内山数雄

登山熱の勃興は、日本アルプスを踏破するもの、年々万を数えるようになった。しかしこれは、盛夏の候の登山である。雪のアルプスの荘厳なる姿は、おそらくは天下に冠たるものであろう。スキーをもって、あの白銀の世界に遊んでみたいとは、富山に來た最初の日からの望みであった。出来得るならば、ザラ峠を越し、信州の大町へ出るのは、どんなに痛快であろうと思つた。これが富山中学校教諭中島直人君と二人で、日本アルプス踏破を試みた動機であった。

大正九年三月二十五日、富山市より約一二軒の上滝を通過、千垣まで無かつた雪が急に多くなり、処々に雪のトンネルのようになつてゐた。富山市から約二四軒の芦峯寺村の大正館にザックを下ろした。二人はスキーを持って、部落の北方のお宮の裏山へ滑りに行つた。

た。スキーのよい練習場で、子供や青年が多数見物にきた。

夜は老練な獺師や熟練な中語(立山の案内人)を呼んで、雪の立山温泉やザラ峠のことを訊ねた。その通過はなんでもないと、事でも、今も獺師の四五人が山奥へ入っており、樵夫も何人か仕事に行っている。しかし、昨日泡雪が降つたので登山はできぬという。この分では幾らかカンジキをはいても山は歩けない。二三日滞在して、泡雪の固まるのを待たねばならない。獺師も樵夫も泡雪の締るまで木の洞の中か、小屋に籠って決して出歩かないと吾等の無暴をしきりに止めた。

三月二十六日、朝八時半ごろ宿を出た。心配する村人に中島君は「僕等は素人でないから安心しておって下さい」の一言を残した。旅行日に制限のある吾等は、泡雪が降るからといって滞在するわけにはゆかぬ。行ける処まで行つてみようとか発したのだ。

芦峯寺から藤橋へは約五軒。道路は雪崩と石崩れで、一つは危険一つは道の欠壊で通行できない。常願寺川の川原をスキーで進み、支流の落合には崖を上り、雪の下

の道を辿つては川原を縫つた。藤橋へ十一時ごろ着、二人の樵夫がいる小屋があった。そこで中食をすまし、称名川の藤橋を渡つて、黄金坂及び草生坂を登つた。この日熊王権現の上まで行く予定であったが、坂はスキーではなかなか困難、その内に峰は雲に包ま

れて、泡雪が降りだした。天候の悪化で止むなく藤橋へ引き返すことにして、直ぐに滑走を始めた。草生坂を半制動で下ると、泡雪が足下から駆け落ち、落ちるにつれだんだん大きくなり、最後には直径二米位の雪塊となる。

坂の下に小林区署の官舎があったが、冬は無人で屋根まで雪が積つてゐた。夕方藤橋の樵夫小屋に戻り、同宿を依頼した。中島君の料理の妙手に樵夫も舌を巻いてゐた。

夜は地図を出して、立山の状態を訊いた。この樵夫はザラ峠を越えて黒部川の平の附近に数日間も仕事したことがあり、黒部の主といわれた有名な岩魚釣りの遠山品右衛門老をよく知つてゐた。

「あの老人は岩魚の臓物を食つて飯の代りにしておつた」と語り立山温泉のコースは、多人数で途中工事を施さなければ行く事は困難とのことだ。吾等はとにかく、明日は温泉に向つて進むことにして寝についた。小屋には鼠が多く睡眠中に度々顔のあたりにくるので、どうも気味が悪るかつた。

三月二十七日樵夫小屋を朝早く出発した。立山温泉までスキーが可能であれば、六七月頃まで雪があるから、我国において最も永い間スキー練習ができる所である。二三月頃のスキーコースを探索して早く天下の同好の士に紹介し、天与のスキー練習場を開き、多くの社会人に便利を与えたいものだ。

鬼ヶ城の險と、悪天候で泡雪が降るので止むなく引返し、危険の少ない処を選んで材木坂の方に登り、そこから藤橋へ滑走して戻ることにした。途中二人はこの泡雪の雪崩と天候さえよかつたならばとつぶやきつつ材木坂へ進んだ。中腹まで登ると、坂はますます急を加え、如何ともするを得ない。雪はすべて湯川側へ落ちつくし、一歩踏み外せば湯川の谷底から総身がギリギリしてくる。

中島君はブナの根の安全な処に腰をかけて動かない。どうした事かと見れば、眼を閉ちて危険に望んでの精神統一をやつてゐる。それから一人が上に登つて二台のスキーを受取り、次に一人が登る。峻峻なこの坂には二人は大いに困つた。漸くにして材木坂の頂上に達し、それより称名川の斜面に茂る森林滑走で、再び藤橋の樵夫小屋に戻つて泊つた。

明日は立山の弥陀ガ原を極めようと、携帯品の整理をなし、輕装してでき得る限り、雪の立山の奥を探らうと、地図を研究して、早く眠りについた。

三月二十八日 未明起床、朝食をすませ、二人の樵夫が熟睡してゐる朝の四時頃出発。黄金坂、草生坂、千手ガ原、材木坂を登つて岩窟の祠のある熊王権現に達したとき、東天が紅くなり、旭日は霧山から登つて、北アルプス連峰は美しく白銀に光つて、またと見られぬ美観である。ブナ平辺りまで行くと、中島君

が、この辺に鼻のような声があるという。立止つてよく附近を見ると、樵夫小屋があった。入口に行つて、オハヨーというところ、中では吃驚したらしい。入口の簾をまくって中を見れば、小屋一杯の人である。吾等を歓迎するので、中へ入つて火にあたれば、六十歳ばかりの樵夫は「この歳になるが、雪の中の立山登山はあなたたちが初めてだ」という。立山の地理もなかなか詳しい。今日一日の案内人を依頼すると快よく応じて、若い最も元氣のある樵夫が、ねじり鉢巻に弁当を只一つ背負い、カンジキをはいて直ちに出発してくれた。樵夫が中語に変わった訳だ。撫平の大森林は眠るように静かで、兎、貂、狸等の足跡が縦横についてゐる。天与の大公園は平々坦々たる大道を行くが如しで、ことに撫平の針葉樹林の雪の美観はおそらく日本一である。

刈安峠は泡雪雪崩で、登りにやや困難を感じた。それより少し進めば、左手に称名滝がある。冬は一物の遮るものもなく全貌が観られた。中項が二段になって、滝壺が二つ青々としてゐる。中語の話に、今より五六年前、中磯幸次郎という獺人が、友と立山へ熊狩に出かけ、小熊をとつて一足のまま担うてきたが、一ノ谷の附近で雪崩にやられ、如何に尋ねても遺体が見つからない。多分この滝壺でくだかれたのだろう。何日かの後に、足一本だけ芦峯寺村へ流れ出たという。

この一帯に老杉が多く、中が洞になつてゐるのがあつた。三人は洞の中で火を焚き、湯を沸し、飯盒で飯を暖めて食つた。熊人は泡雪のときは何日でも入つてゐるといふから、避難する港のようなもので、天幕の二枚もあれば天然の小屋ができる。ここより四軒ばかり進むと、立山森林帯の終局がすなわち弥陀ヶ原である。

×

弥陀ヶ原は白い海のような。広さと傾斜はおそらく世界一のスキー練習場であらう。イリノメータで傾斜を計ると六度から一〇度くらいだ、海拔一六〇〇米を越すこの高原、左に大日岳、右に銀崎山、前に立山。やや右に鶯岳、鶯岳の諸山がある。後は富山平野、能登半島。夏の遠望は暖味模糊となるが、冬の澄み切った大空の下では、富山市の大きい建物は一一つ認められる。

原頭の弘法茶屋も追分も全く雪の下で不明だが、多分この辺であらうと、中語が示してくれた。立山温泉の所在を知るために弥陀ヶ原の南側に進んで、松尾坂に登れば、温泉は眼の下である。松尾坂はスキーで下れば、わけなく通過されようが、直滑降では九天直下、半制動で痛快な急斜面である。湯川に沿つて温泉に行けぬときは、熊人はこの急坂をボーゾリといつて、杖棒をもつてカンジキのまま滑り降りるという。

温泉の二階は雪に埋れて、少し小高くなつてゐるだけだ。附近の多枝原ノ池、刈込ノ池などすべて

真白だ。新潟だけが盛んに湯気を吹いてゐる。この新潟の少し上がザラ峠だ。ザラ峠を越え、さらに針ノ木峠を越えれば信州の大町に達するのだ。ああ、あのザラ峠を越えてみたい。前に聳ゆる立山の頂上も極めたい。吾等の欲望は余りに多すぎる。時計は三時に近い。ブナ平の小屋へ戻らねばならない。

このとき、少し空模様が変わつてきた。この広漠たる高原の、しかも見渡す限りの雪原に一陣の風が起つたならば吾等の命はないのである。これ以上今日は先へ出ることはならぬと、中語はいう。直ちに滑降にうつつた。

×

撫平の小屋に着いたときは、暮色蒼然として、もう藤橋まで帰ることはできない。明朝快晴であつたら、未明に出発して立山の頂上を極めようと思つて、この小屋に泊めてもらふことにした。樵夫のいうには、雪の凍つた朝であれば、立山の頂上まで何等危険がない。松尾坂から約四軒で室堂、それから約四軒で立山頂上だ。ただ天候と時間の問題である。この二つがうまくゆけば目的は達成せられる。熊人は撫平の洞穴に一泊して、雪の凍つたときは浄土山の東方を迂回して、黒部の平ノ小屋まで一日で行くという。

二間四方の小屋の中に、熊の如き頑健な体をもつて、原始時代のような生活をしてゐる十七人の樵夫と一夜を明すことになった。六十歳ばかりの老樵夫の話に二

人は疲勞も睡眠も打ち忘れた。安政の昔、立山温泉の東に連聳する大鷲、小鷲の二山が、地震に揺れ崩れ、土砂が湯川に堆積して一大湖を作り、温泉附近に働いてゐた本宮村の樵夫三十有余人は一人も残らず土の下になつた。そのため本宮村は女ばかりの村になつたのである。その湖の口が欠け、常願寺川に湖水が溢れ出し、沿岸の村落五十箇村を浸し、赤いたすきと、赤いおこしとで名高い越中田植え乙女が、何知らず田植えに余念ないところを、二百人ほども流し去つたといふことだ。

また、天正の昔、富山の城主佐々成政が、羽柴秀吉に異図ありと疑われ、麾下五十を率いて、雪中のザラ峠の險を極で越えて東海道路にて、徳川家康、織田信雄を説き、またこの道を通つて富山へ帰つたときのこと、彼のナポレオンのアルプス越えと東西一対の武勇伝とされてゐる。吾等は、昔の人がやつておるのに、今の者ができないといふ事がない。明日は必ず立山の山頂を極めようとの希望をもつて寝についた。

二間四方の山小屋に、十九人床に入つたが身動きもできぬ。足をうんと伸すと、人の頭や顎にあたる。全く人間のすし詰めだ。

×

三月二十九日、夜半より雨であつたらしい、細雨はついに雪に変わつて、雲霧は高原一帯をこめて見る間に小屋を包んでしまつた。吾等の失望と悲歎は名状すべからざるものである。咫尺を辨ぜざる雲

霧に對しては、スキーも地図もクリノメーターも万事休すだ。吾等はこの高原に滞在して時機を待つには時日が足らず、加うるにパンの欠乏をきたしてゐる。

富山市を出てから五日、その間芦峯寺村の宿屋で安眠しただけで、その他はすべて樵夫小屋、大木の洞穴、岩屋の中などで、軍隊用の飯盒で炊事をした。あつた飯、あつた汁、あつた湯はたちどころに得られる。いかなる雪、いかなる寒気にも堪えるだけの用意はある。しかし咫尺を辨ぜざる雲霧は如何ともすることができない。下山と決定した。

雨はますます強まり、雪崩が多く、その日は芦峯寺村へ帰ることができない。またこの小屋に泊ることになつた。

×

三月三十日朝は雨も晴れた。吾等が四五日の間滑走した雄大な立山にお別れをしなければならぬ。二人の樵夫に厚く礼をのべてことを立つた。

途中危険の処が多かつた。雪は四五日前より著しく減つた。雲霧は深くまた立山の山容を包んでゐた。互に顔を見合せて、雪の反射光線に真黒になつたのに驚いた。動物は雪の保護色は白であるが、万物の霊長は黒となるなどと笑ひながら芦峯寺村についた。村人は吾等の無事で帰つたのを喜んでくれた。黒山のように集つた子供の希望で、お宮の裏山に登り、九天直下の滑走や、電光形の滑走をやつてみせた。子供は大いに満足し

ておつた。

上滝をすぎた大久保にて、汽車で富山市へ帰り、六日間の立山スキー登山旅行のザックをおろした。スキー旅行は航海の如し、ことに立山の高原はそうである。地図とコンパスがあり、天氣の好い日であれば、何等の危険はない。中語も用はない。晴天は四五日も続けば、立山登山も、ザラ峠の突破も決してできない事はない。この度の登山によつて多くの経験を得た。高原のある場所では、雪がスキーに附着する。杖の先の鉄のところに雪が付いて如何ともすることができない。蠟を塗ることの研究が大切である。その他携帯の防寒具、炊事具等の種々の研究ができた。これは他日稿を改めて書いてみたいと思ふ。

〔編者付記〕

筆者内山数雄氏については、すでに二一〇号会報(35年8月号)に「雪の北アルプス横断記」を掲載したときに紹介をした。

明治十八年生れた内山氏は現在郷里新潟県岩船郡神村で自適の日を送つて居られる。

本稿は雑誌「中学世界」第二十四卷、第四号(大正十年二月一日発行)に執筆されたもので、そのときの標題はつぎの通りである。

行方不明を伝えられた予の雪中アルプス登山

富山県師範学校教諭

内山数雄

本稿転載につき、藤島玄氏に原稿の浄書を頼み、内山氏に校閲を乞うた。假名遣いを現代に改めたほか、わずかではあるが一部を削除した。



沢とイワナとオヤジ

中 屋 健 一

今は日本中どこへ行っても、他の人間に会わずに山登りをするとはほとんど不可能になってしまったようだが、私には八日間全く人間を見なかった山旅の経験があった一回だが、ある。もっとも、この旅でも雨のため二日間同じところに滞在したので、正味は六日ということになるのだが。

それは昭和四年の八月、北海道のニセイチャロマップ川を溯って武利岳に登り、武利川を下って丸瀬布に出た山旅である。当時旧制高校生だった私が、大学生だった

成瀬岩雄先輩に連れて行ってもらった旅で、名寄の高橋浅市という人を案内人兼荷かつぎに雇った。もっともこの人もこの川を溯るのは始めてであった。

この山歩きは、山登りというよりは沢歩きだが、何といっても北海道の沢は内地とちがって長い。ニセイチャロマップの源流近くの沢には、岩魚がウジャウジャして、徒渉すると岩魚が足につかかった。人みしりしない岩魚のことだから誰でも簡単に釣れ、ある夕食で私は一度に三十八尾食べたら、成瀬先輩から腹をこわすと叱られたことを記憶している。

オヤジの姿は一度も見かけなかったが、ある日武利川を下っていたら、まだ水分が充分残っているオヤジの足跡が岩の上にはっきりと記されていたのは、ギョッとさせられた。

このあたり現在はどうなっているかは知らないが、こういう山歩きの場が次第になくなっていくのは淋しいものである。

誘われた山のぼり

日 高 信 六 郎

昨年八月はじめてに「ついで

に登った山」のたよりを会報にのせてもらった。その続きを書くとなると、こんどは頼まれたり誘われたりして登った山がほとんどで、自主性のないこと夥しく、いささか恥かしい気がするのだが、その中には未知の山や待望の山もあって、当人はけっこう楽しんだのである。たいてい大事なカンどころで降られたのは、平素の心がけのむくいとあきらめている。

前年いらい信濃毎日主催の山岳学校の校長を引受けさせられ、こんどは八月下旬に白馬ということになった。万事は別校長の小島六郎さんにおまかせして、第一次では一行からはるかおくれで大雪渓を登ったら、「お神立ち」に見舞われてズブぬれになった。翌日は女子隊に加わって鍾温泉に下りたが、出発早々疎忽にも向脛を岩に打ちつけて、リーダー古原博士のお世話になったのは面目ない次第であった。第二次のときは傷にかこつけて、猿倉荘の開講式と八方山荘の開講式だけのキャンセルをやらせてもらった。

そのあい間には小谷温泉に三日を過ごし、旅館の御主人で、早大山岳部大先輩の山田さんと歓談したり、親の原の東急山荘に泊って柵池まで往復したりして、ひとりで楽しんだ。

九月上旬札幌での会議が層雲峡でお開きになったあと、道庁林務部の中村、奈良岡君のお世話にな

って、自動車の旅をはじめ、八方台まで上って大雪連峰の紅葉をながめ、石北峠を越えて網走から斜里に泊り、知床岬まで船で往復し、岩尾別から羅臼岳に向った。三笠宮殿下や榎さんの案内役をつとめた土地の好青年二人に導かれて登ったが、風が強く、途中から霧と雨がはげしくなったので、頂上を断念して羅臼温泉に下った。ここにも岩尾別と同じく新しい温泉宿が建っていた。

翌日からは晴れて、標津から野付半島、根釧原野とまわってノサップ岬にいたるまで、国後の島山がイヤというほど鮮かに見えつづけた。いたるところ熊の出没にやまされて、標津町役場には「熊害対策本部」の標札が出ており、自衛隊が出動して学童の送り迎えをしていた。札幌からは洞爺湖に往復し、昭和山を見上げた。戦争中とはいえ、世間の知らぬ間にこんな山塊が誕生したのはチョット世界に類がないだろう。

十月上旬には栗駒山に出かけた。宮城、岩手、秋田三県から招かれた自然公園審議会の数人は、一の関から登って駒の湯に下り、鬼首に泊って荒雄岳を一週し、鬼首峠を越えて秋田側に出るといって総花的視察であった。自動車で乗りつけた須川温泉のあたり、紅葉がきれいであったが、山は例によって雨、頂上から駒の湯へは新しく開けた尾根道を下った。

一行とわかれて越後小出にかけつけ、東京からの会員や越後支部の諸氏と落ち合って銀山平に泊り荒沢岳に登った。わたくしは漫歩組は難場に時間をかけすぎたため前山で時間切れとなったが、珍しい好天気にもぐまれ越後の山々を飽かず見入った。

越後支部主催の佐渡島めぐりは面白かった。十一月一日神谷、野口両御夫妻をはじめ大ぜいの山仲間が二台のバスに満載され、二日にわたってあちこちくまなく見せてもらった。タダラ峯からドンデン池、金北山など頂上近くまで自動車みちがつけられているのが、いずれも霧にまかれて風がすよく、わたくしの山のぼりにふさわしい風情を添えてくれた。

十二月中旬には、ふるくからの友人に誘われて会員藤島君と同行三人で沖繩に飛び、宮古、石垣両島まで十日ばかり、たんねんに見てまわった。沖繩に高い山はなく、最高峯は石垣島のオモト岳五百二十五米、それも眺めるだけなので、アチコチの坂みちや石段を足はやに歩きまわる。それでも旅の終りに近く、石垣島のそばにある竹富島という古風な島をたずねて、火番盛（ツーバンムン）という烽火台のあとに登ったところ、三角点の標石が、デントと頑張っていた。標高まさに二十米五。

八甲田山・鹿内翁の訃

村井 米子

八甲田山酸ヶ湯の鹿内辰五郎翁が去る三月十八日永眠した。明治十三年八月六日生れ、八十六才の天寿を全うし、安らかな往生だったと、酸ヶ湯の大原誠一社長、喪主鹿内吉明氏連名の通知にある。

まことに明治、大正、昭和の変遷をよそに、八甲田の自然とともに生き抜いた人、俗に鹿内仙人と愛称された面影がしのばれ、もう再び生まれて来ないタイプの山男が、また一人失われた痛恨が深い。

明治の大事事件、『雪の進軍』の八甲田行軍遭難捜索隊のラッパ卒として苦心した話は、鹿内さん自身の口からたびたび聞いた。そののち酸ヶ湯の山守となって八甲田山を熱愛し、実に心をこめて守ってきた精神と真実とは、この十余年スキーに入山する私の心をうつものだった。

ことに三十二年正月の八甲田二重遭難事件のとき、スキーを穿いて吹雪の夜の山に立ち尽す信念と熱意は、鹿内さん老いずの感があつた。鹿内さんのスキーは、後の弘前大学長郡博博士が大正初期の留学より持ち帰り、輪カンとの登山競走をしてからだった。助けられた遭難者も数々ある。

大町桂月翁が

「なめくじを食ふ男あり陸奥の山」

と詠んだのも鹿内さんのことだが、いま国際人となった板面の棟方志功氏とも幼な馴染で爾汝（じよ）の間柄である。

もう有名人となつてからの棟方氏が、「おめいのは子供の面みてえだ」と言われて、ハッと平伏して歓喜したと大原さんに聞いた。

古い軍服の胸にたくさん山岳会のバッジをつけ、尺八、横笛、ラッパ、斧、水筒など七ツ道具をガチャガチャさせ、客の送迎にラッパを吹く鹿内さんはたしかに酸ヶ湯名物だった。大浴場の夜の湯けむりにかくれて、そっと入っている、りゅうりょうと流れる横笛の音は、大原さんの尺八とともに海に旅心を奏せさせた。

強いなまりの言葉で半分は解りかねたが、吹雪の話、熊の習性や食物の話、山菜の話などこまごまと、水芭蕉の見事な株をとつてくれたので柳田国男先生に喜んで頂いたこともある。

一時、ジャーナリズムに踊らされかけたが、その悪影響も及ばぬほど徹底した自然人の生涯だった。

酸ヶ湯の社葬の礼を受けた鹿内さんの魂は、今後も永久に八甲田山と酸ヶ湯を守るだろう。登山者にとつても、忘れられない山男である。

カット・川喜田社太郎

図書紹介

一人ぼっちのヒマラヤ

向後 元彦 著

この本は本会員向後君が、一九六二年四月から翌六三年七月まで大抵一人でヒマラヤを歩いたときのことを綴つたものである。当時東京農大農芸化学科の学生だった同君は、ヒマラヤへの憧憬やみがたくカルカッタを経てビラトナガルへ行き、ダーランから愈々ヒマラヤの山脈をはじめ。島田氏と二人。ダーンクタ、チャインブル、カードバリを経て八月二十七日、島田氏と別れた著者は、ポリス、人夫各一名をつれてバルン氷河を目指す。九月一日バルン氷河上にビバーク、マカル、エヴエレスト、ローツェを間近に見て減多人の通らぬルンク・コリアをハチア下り、九月二一日チエポアで島田氏と合流。一〇月中旬著者は再び単身ルンバサンバ・ヒマールを探索し、レーサ・コーラを登ってオンボ・ラに達する。さらにワルンチュン、グリーンサ、カンパチェンと進んでカンチ氷河を見物し、十一月五日タプレジュンに下つて島田氏と合流、ダーランを経てカトマンズへ。六三年一月下旬インドの一人旅がはじまる。ダーリリン、プーランのぞき二月アッサムの東端サディヤまで行ってカルカッタに戻る。三月東京農大のエクスペディションに加わ

り、トゥインズを目指す。トゥインズから撤退後六月、クンガ・ノルブとツィンマ・ピーク（六三九〇m）と同南峰（六三〇〇m）の登頂に成功、七月半羽田へ帰着。

これが著者の行程概要だが、最後のトゥインズ遠征は「山岳」にも述べられている。しかも、本書の面白味は、著者が一人でヒマラヤを歩いている部分に多い。長期に亘る現地民との深い接触からも、他の遠征隊の報告などからはうかがえない記述が少なくない。その上著者は、まだ学生でありながら極めて広く深くヒマラヤの文献に目を通し、そのことが文章のなかによくにじみ出ている点も、最近のヒマラヤ紀行文では他に比を見ない。文章もよくこなれていて、読者を飽きさせない。登山隊の型にはまったこび方と、その記述にやや食傷気味の人には、清涼剤のように迎えられるであろう。挿入の写真も、この種の本としては良好で、その選択もよく、略図も親切である。向後君の今後の活躍に大いに期待する。なお、まえがきを深田久弥氏が書いている。（文庫版二六〇頁・昭和三九年十二月十日ベースボール・マガジン社発行・秘境探検双書・定価三五〇円）（望月 達夫）

山旅と随想

— 紀行・随筆集 —

田部 重治 著

田部重治さんの近著。「山旅と随想」まことに平凡な題であるが、田部さんの文章は親しみやす

いので、新刊書が出るとなるとつい読んで見たくなるのである。内容は紀行、随筆、短歌の三部にわけられてある。「終戦直後から最近に至るまでの間に、新聞や雑誌の依頼をうけて、また、自分のメモのため書いたものの内、書物として発表されなかったものが相当沢山ある」その中からまとめたものであるとのこと。紀行は戦前の伊豆一周、永平寺のふたつ、戦後は雲取山などのほか家族サービス旅行六篇、それから随想二十ほど。

「十時に頂上についた。富士山の一角が雲に蔽われているのを除いては、どこにも雲がない。先づ家族たちに郷里の立山と薬師岳とを教え、そのずつと左に白くふわりと宙にうかんでいるのがお隣りの加賀の白山と教えるけれど、郷里へ行ったことのない孫たちは割合に関心を示さない」これは木曾御岳の頂上のありさまを記しているのであるが、田部さんらしい筆づかいである。すなおな読みやすい文章であることは、どの章をひもといても相かわらずである。でも、定期バスを乗合、距離を里であらわすのは田部さんらしいと思ふ。

なお、この本で特記したいのは、はじめて短歌を四十ちかくあつてあることである。

横川に驚なくと今日ききて裾野の春の近きを知りぬ湧き返る雲みな消えてさやかにも仰がるかな八つの峯々嶽とるに疲れて立てば八ガ岳五

月の空に雪の光れる
はじめの三首を記してみた。

はさみ込みの写真はアート紙六ページ、装いて、組方は平凡であるが、内容でこれをじゅうぶんおぎなっている感じである。とにかく田部さんの文にはハタタリがすこしもないからすきである。

B6判、本文二三五ページ、世界文庫発行、定価三八〇円、ほかに限定部番号付一二〇〇円。(小野 幸)

故人の手紙

はじめに――

篋底からとり出された故人の手紙には、いろいろ思い出多いものがあるが、なにも本会のように長い歴史を有する会では、故人となった方々の書簡には、思い以上に貴重な歴史的意味が考えられる。

ここにご紹介する高野鷹蔵、高頭仁兵衛、西岡一雄三氏の通信も、それぞれの方々に便ぶほかに将来なにかの資料となって生かされることをねがうものである。(編者)

☆高野さんの手紙(一)

創立発起人の一人であった高野鷹蔵氏は、会の黎明期に総務・編集などの会務に尽瘁されたことは、三十九年度年次晩餐会の折、会場の隅に展示された諸資料からうかがわれたが、晩年になっても会に対してかわらぬ関心を示されていた。次の手紙は「山岳」54年発刊に際して、編集者望月宛に寄せられたものである。(望月 達夫)

高野鷹蔵

望月岳兒

「山岳」拝受、御丹精の程有り難く感銘の至りで御座います。往年山岳を小島君とやっていた頃、独逸オーストリア山岳会の会報を見て、あしたの内容のものが出したいと、幾度か考へましたが、その頃の夢が今、見られるわけで御座います。嬉しい事です。

偕て突然ですが、最近の週刊朝日に小杉放庵氏の記事があり、ふと思いついた事は、同氏は山岳二年の表紙を画いた事もあり(此れは城君が画せたと思いますが)その頃、小杉さんの先生の五百城文哉氏と知り合ひであり、小杉さんとも知り合ひと思います。

五百城氏は山の絵はあったかどうか知りませんが、山岳会初期としては吾々山登り党に知られていた人ですが、或意味では日本の登山界の先駆者?であったかも知れません。横浜や日光などで外人土産に売っていた、日本の水彩画家と云ふべきでしょうが、小杉さんあたりに此際五百城氏の事を山岳でも会報にでも書いてもらったら如何でしょう。私は昔は炭木を通して小杉さんとは面識がありましたが、今は全く存じ上げていませんから、若し右につき何か御考へがありましたら、山岳会の名で小杉さんに御交渉下さったらと存じますが、よけいな事です。気がつきましたままに申上ります。

不順の候愈々御健祥を祈ります。五月廿日(昭和三十五年) 敬具

五百城氏の高山植物の懸軸は美事なものでしたが、何処かに残っていますか? 美術的にはどうか存じませんが、丸山君のものより写実的(標本的)でした。

私は早速高野さんへの礼状をしたため、そのなかに、小杉放庵氏へどういう方法でお願いしたのか、ということを書いた。すると折返し高野さんからのハガキに接した。

×

小杉画伯の事につき早速御手紙を頂き御存意有り難く感銘の至ります。ふと考へついた事は、石井鶴さんあたりを活用したら如何です。ちと小杉さんは古過ぎて、ササガの藤島君も引ッかかりが見つかるといふか。画家としては大下藤次郎、丸山晚霞あたり、小島君との関係もあり、更に古くは高島北海さんなども山岳会の初期とは関係があります。

藤島君と御歩るきの由羨望の至り、足の痛みが「アリナミン」とれたと喜ぶ人間になつては、終着駅もあとイッつかと云ふわけですね。(以上 望月 達夫)

高野鷹蔵

右は五月廿四日付のものが、私はそのことが気になりながら、その年の七月上旬札幌へ転勤となって、つい今まで折角の高野さんの御意見を實現できぬままに放置してしまつた。内心忤ねたるをまぬがれません。

☆高野さんの手紙(二)

附、高頭仁兵衛氏書簡――

望月氏あての手紙につづいて、同じく高野さんのつぎの手紙をご紹介します。

よう。これは高頭仁兵衛氏の筆蹟を会の図書室に残しておきたいという高野さんの配慮から、高野さんあての高頭氏の「手紙」を先年編者あて送って来られた。そのときの添え手紙である。

×

鉛筆書きをお許し下さい。七年前に胃の手術を受けた時、右手甲の血管から輸血された祟りで、時々指が軽いマヒを起し、鉛筆書きが一番楽なためです。――以下略――ちなみに高頭仁兵衛氏の書簡は別掲のとおりである。

この高頭氏書簡は、三十七年度年次晩餐会で披露され、いま会の図書室に保管されている。(古沢 肇)

拝啓

此頃、古手紙を整理して見ました。高頭さんからの手紙を見出し、高頭さんの筆蹟がない(残っていない)かも知れませんかと思つたので、御手元に御送り申上げますから、おついでに折、図書整理の御係りの方にお渡し頂き、会に保存しておいて頂きたいと存じます。発起人の一人としての高頭さんの自筆を残しておいたらと思ひますので、――

小島さんのは辻村の遺稿集にありますから、――

此の、高頭さんの返事(編者注カッ)は、山岳会が創立される際、発起人の一人であった城数馬氏が高頭さんの自宅を訪ねたこと

があります。つまり高頭さんと言う人の身許調査に行ったわけですが、其の時、城さんがどんな経路で高頭さんを訪ねたかと言う説が色々あり、それを確かめるべく私から手紙を出した時に高頭さんから来た返事です。

城さんと言う人は当時弁護士で東京市会議員であり、同氏の発意で自身出かけたわけですが。

海(まこと)にタワイない手紙ですが高頭さんの筆蹟を残しておきたいと思ひつきましたので、私はどなたが御係りか存じませんが、まことに御手数を御願ひ致す次第で御座います。

昭和三十七年十月廿一日

高野鷹蔵

編者は右の手紙とともに送られてきた高頭氏の「手紙」を読み、内容について若干の質問をしたら重ねて、つぎのような返事があつた。

×

御来示のあの手紙の中のお金の事は何んで用立てたのか、いくらだったか思い出せぬ程ささいな事です。

或いは相乗りしたタクシー代かも知れません。高頭君の逸話は大きい御酒の上の事で、酔ふと吾々も家来と同一視してコゴトを言われたものです。

明治時代のあの辺(越後)の地主さんは先ず昔のお殿様格でしょう。行きかたがう人は雪の中でも道をよけて雪の中に入らなくまっています。古い話ですが、私の如き都会人(横浜)には驚きと不思議で

した。
高頭さんの奥さんは昔の越後の市島家(当時の多額納税者)のお嬢さんですが、私などとは同席しても下手に座るのです。明治生れの吾々にも不思議に思われまし

(中略)

旧発起人の手蹟も梅沢君のを捜しましたが見当りません。武田君の所には残っているかと思ひます。その内武田君に頼みます。城さんのは何処にもありませんまい、ちと年代が違い過ぎます。

三十七年十月三十一日

高野鷹蔵

高野さんの手紙には、右のほかに会の長老の座談会の企画を提案された編者あてのものがある。年代を分けて、いくつかの組を示され、話題の内容まで想定して居られて拜見して面白いが、残念なことに生前実現してお目にかけることができないでした。またご自分では一度、辻村伊助氏の思ひ出を語る集いをしてみたいと書いて寄越された。これらの手紙も同時に紹介したが、紙面の都合で割愛する。

以上、古沢 肇記

☆五枚の絵ハガキ

終焉の地からの西岡さんの便り
西岡一雄さんが逝かれてから一年半の歳月がすぎた。片雲漂泊、旅に果てることを本望とされた西岡さんにとって、その終焉の地、宮崎はいなくお氣にいられたことである。亡くなられるまでの滞在約一カ月のあ

いだに、その地からといた五枚の絵ハガキを紹介させていただきます。ありし日の西岡さんをしのびたいとおもう。

(荻野和夫)

(注) 一、西岡一雄(会員番号一二二二)

昭和廿九年二月六日 歿

二、宮崎藩在官 宮崎市木花町上曾

山寺 谷口別荘

三、昭和廿四年以後、西岡さんは丹波に住まわれたが、毎冬、暖冬の地へ避寒滞在され、この年は宮崎へ行かれた。

高頭仁兵衛氏書簡

謹啓

御下問の件は

其前夕に長野から城氏から明日伺ふと云ふ打電あつて翌日に城氏が御来訪になりて老生宅の老生舘影になりたも銀色編眞御携りになりて御帰宅になりて其後長野にて心村君と三人に面会せる事ありたり
右御返事迄何れ水虫全快次第参上御返金を申上ますも木筆ながら御内呈様へよろしく愚妻よりも異々よろしく申上られとの事にて候 敬具

高野岳兄 會下

一月十一日付

(はにわ公園の絵ハガキ)

六日、大阪から宮崎へ飛びました。その日の中に宮崎神宮とか平和台とかの名所をみて表記へ落ちつきました。当地の山岳会の方々の尽力で愛で向ふ三ヶ月の越冬をする筈です。今日は青島とか堀切峠とか、近くの名所地を歴訪しました。近く追々と宮崎県下にある

き回るつもりでおります。煙のなまち、街路の美しい珍樹のまち、則ちフェニックスや楠の大木、夾竹桃の並木みち、流石にあたたか南国情調ゆたかなうららかな都市です。

(注) 谷口別荘

一月廿二日付

(青島びろう樹と波状岩の絵ハガキ)
滞在は四月上旬迄故、有意義に

(昭和二十五年十一月二十九日付)

所から市街地迄約三里、けむりもほこりも立ちません。川が枕近く流れ海は二丁ばかりのところ波打っております。今年は必ず上京したいと存じています。石原先生の御達者には驚く。しかし、私でも胸さへわるくなければきつとまだ登山は続けていたでしょう。

(注) 一、小生から石原憲治さん(東京支部長)の正月富士登山を報じた。

二、西岡さんは昭和廿四年京都郊外の療養所を退院された。

一月廿五日付

(青島と波状岩の絵ハガキ)
石原憲治さんが、五ヶ所と椎葉といふ題で宮崎県案内の一役を買っておられるのを今日、県のパンフレットで知り意外なところで先生の名をみるものと一寸驚きました。この二三日は毎日雨でどこへもゆけません、過日妻方面をあるき古墳群を探さくして私の好古癖をいやすことが出来てユカイでした。愛はその亜熱帯性の植物と共に恰も南フランスかハワイの海辺のような感じをもつ美しいところで御座います。

一月卅一日

(えびの高原の絵ハガキ)

六万坪の子供の国には一枚の紙屑も落ちませんでした。清浄なみちには、夾竹桃と橘の並木みち、すぐそばを太平洋の黒潮が澎湃と打寄せています。少しくなれてきましたからいよいよ御興をあけてカゴ島との県境都城から大分県に近い延岡そして、十年の役に西郷さんが越えて逃けた可愛岳へものぼってみたいと思っております。

(注) 昭和廿八年のウエスタン祭に参加した西岡さんはその足で上京

二月二日付

(青島街道・夾竹桃の並木みちの絵ハガキ)

御手帖有がたう。大変助かります。宮崎といふところはどこへいっても一筋の煙も上らず国道には看板が一つも御座いません、きもちのよいところですね。並木みちも、変化あり植樹が楠やらフェニックスやら夾竹桃やら、エハガキに御覧の通りです。明日は千七百米程のから国岳へゆきます。南の海辺をあるいていると南仏かハワイをあるいているような風景にあります。神州発祥の国土、祖国日向といふ気が致します。近く九重山荘に岳友を訪れるつもりです。
(注) 小生から手帖を送った。
この絵ハガキを最後に西岡さんからは、もう永久に便りをいただけないことになってしまつた。おなじ日、小生は西岡さんあてハガキをお送りしているが、御返事はなし。多分お読みにはなっていないとおもうのである。すなわち、七日付でつぎの死亡通知がといたのだった。
「西岡一雄儀丹波・国里邸を一時あけ、仰げば身も染まるような、藍色の空をもつ宮崎・青島近郊の谷口別荘に、今年の避寒地として、暖い日々を送っていました。二月四日午後睡眠のまま脳卒中にて、二月六日午前零時五十六分、宮崎市江南病院に於て、安らかに七十九才の生涯を」としました。(後略)
(以上、荻野和夫記)

一九六五年(昭和四十年)

通常会員総会

昭和四十年四月二十四日(土)
午後三時より、渋谷区神宮前三ノ
三二外宛コロボ内、日本山岳会ル
ームにおいて開催。
▽総会次第

出席者 六四名、委任出席
二、〇三三名

・開会の辞

・会長挨拶

・報告事項

山の絵の会、木暮祭、ウエス
トン祭、年次晩餐会、ディレ
ンファース氏来日関係、小集
会七回、海外登山家、諸団体
との交流、海外登山等

・支部報告

富山支部 中田 勇吉
信濃支部 高山忠四郎
静岡支部 牧野 衛
越後支部 山本朋三郎
支部長交代の件 井口 正男
東海支部 松田 雄一
須賀 太郎より

石川支部 池田 知幸より

大分支部 磯野 三郎

永井 清一より

野口 秋人

(以上敬称略)

・三九年度決算報告

折井 健一

(神河内山荘の分も含む)

・監査報告

野口 末延

・収支決算全員承認

・昭和四〇年度収支予算案審議

右全員一致承認

・役員改選の件 神谷 恭
昭和四〇年度の方針 松方 三郎

会費、支部長異動、支部と理
事会、六〇周年記念事業、年
中行事、山岳協会、エベレス
ト登山等に関する件

最後に星野会員より全岳連に関
する提案あり、本件については次
号会報巻頭の会長挨拶を参照され
たい。

・閉会の辞 松田 雄一

(出席者)

岡本龍行、君島久登、関口周也、野萩
守、神谷泰、渡辺文明、星野真、平田
正昭、安彦六郎、国見利夫、折井健
一、山口節子、吉沢一郎、沼倉寛二
郎、日高信六郎、渡辺兵力、小野利
次、藤井運平、加藤泰安、進藤波男、
中保、松田柳子、須田紀子、辰沼広
吉、小松山隆夫、白井久夫、野口末
延、松田雄一、川崎隆幸、倉知敬
一、茂野徹太郎、吉武正子、栗林一
路、川口善三、尹官炳、佐藤隆太郎、
相沢裕文、住吉仙也、宮下秀樹、武
島裕太、田村扇一、藤島敏男、望月達
夫、村井米子、松方三郎、石原憲治、
川崎巖、芳野越夫、福井正吉、中田勇
吉(富山支部)、藤島玄(越後支部)、
斎藤平七(同)、井口正男(同)、高山
忠四郎(信濃支部)、小里頼里(同)、
牧野衛(静岡支部)、山本朋三郎(同)
以上五十四名

・一九六五年度理事

会長 松方 三郎

副会長 三郎 幸夫

渡辺 公平(支部担当)

常務理事 加藤 泰安(総務・企
画・協会)

深田 久弥(会員・図書
辰沼 広吉(遺難対策)
村木潤次郎(指導)
大塚 博美(海外登山・
松田 雄一(庶務・海外
飯野 亨(経理・山
皆川 完一(山日記)
川上 隆(指導)
田村 扇一(調査研究・
竹田 寛次(指導)
田辺 寿(指導・六十周
住吉 仙也(関西・指導)
武藤 晃(医療・調
杉浦 耀子(会費・自
川崎 巖(会報)
宮下 秀樹(会報)

▽監事一名は野口末延氏を再選
▽評議員一名折井健一氏を選任
尚、現在

常任評議員 望月達夫、小原勝郎、
藤島敏男、神谷泰、交野武一、織
内信彦、折井健一、藤井運平
評議員Ⅱ入沢文明、日高信六郎、成
瀬岩雄、早川種三、伊藤秀五郎、今
西錦司、今西寿雄、橋本三八、青
木昇、篠田軍治、川喜田杜太郎、
津田周二、吉沢一郎、村井米子の
各氏、および東京支部など十七支
部、支部長

一九六五年度

東京支部 総会

四月二十四日午後二時より日本山岳
会ルームにて開催

一九六四年度事業報告並びに決算報
告、一九六五年度予算案審議、および
一九六五年度役員改選が行われ満場一
致を以て承認、可決された。

昭和39年度決算報告

社団法人 日本山岳会東京支部

科 目	予 算	決 算	備 考
(収入の部)			
前年度繰越金	14,024	14,024	
前年度事業収入	85,000	85,000	
事業雑収入		32,603	タイタック バッジ
		20,491	
計	99,024	152,118	
(支出の部)			
事業通渉費	40,000	10,570	
業務費	20,000	28,441	
業務費	3,000	0	
業務費	10,000	8,395	
業務費	2,000	1,030	
業務費	3,000	140	
業務費	15,024	36,700	
業務費	6,000	6,000	
計	99,024	152,118	

上記決算報告は相違なきものと認めます。 支部監事 折井 健一 沼倉寛二郎

昭和40年度予算案

(収入の部)	(支出の部)
前年度繰越金	事業通渉費
60,842	40,000 (講習会その他)
85,000	40,000
	20,000
	6,000
	6,000 (第三水曜会)
	2,000
	25,842
	6,000

上高地山荘決算報告

(昭和39年4月~昭和40年3月)

○収入の部	金額	人数
使用料		
5月~6月	22,200円	55名
7月	38,000	78
8月	94,400	196
9月	18,000	36
10月~11月	28,950	67
1月	5,000	10
計	206,550	442
JACヨリ補助金	100,000	
前年度繰越金	36,245	
合計	342,795	
○支出の部		
管理費		
5月~11月	116,700円	
小屋管理人謝礼	6,007	
通信交通輸送費	55,380	
燃料費	5,060	
石油・プロパンガス	6,065	
交際費	2,676	
備品費	4,485	
其他雑費	196,373	
合計	146,422	
差引次年度繰越	145,842	

▽出席者 一九六五年度通常総会出席
者と同じ
一九六五年度役員
支部長 石原 憲治
委員(業務分担)
総務 沼倉寛二郎、関口 周也
会計 富田美知子
山口 節子
西丸 震哉、片桐理一郎

集 会 村野 越夫、田中 久保
録 小野 利次、鈴木 敏郎
記 小野 秀純、鈴木 敏郎
監 折井 健一、安彦 六郎
評議員は前年度に同じ

昭和 39 年度収支決算表

39.4.1~40.3.31 (単位円)

科 目	収 入 の 部		予算に対する 決算増減 (△)	科 目	支 出 の 部		予算に対する 決算増減 (△)
	予 算	決 算			予 算	決 算	
経 常 収 入	2,530,000	2,653,624	123,624	事 務 費	918,000	318,050	△ 99,950
入 会 金	150,000	396,000	246,000	俸 給	300,000	278,000	△ 22,000
入 会 費	2,380,000	1,862,600	△ 517,400	文 具	25,000	23,315	△ 2,685
旧 年 度 会 費		322,400	322,400	印 通	150,000	76,425	△ 73,575
		72,624	72,624		417,000	403,440	△ 13,560
事 業 収 益	977,000	1,500,240	523,249	交 通 費	26,000	37,870	11,870
				管 理 費	166,000	489,291	323,291
山 岳 告 料	200,000	169,000	△ 31,000	火 災 保 險	10,000	11,225	1,225
山 岳 告 料	35,000	48,020	13,020	火 災 保 險	7,000	6,850	△ 150
山 岳 告 料	20,000	255,338	235,338	火 災 保 險	30,000	7,363	△ 22,637
山 岳 告 料	570,000	545,865	△ 24,135	火 災 保 險	49,000	37,172	△ 11,828
山 岳 告 料		2,590	2,590	火 災 保 險	70,000	68,831	△ 1,169
山 岳 告 料	17,000	2,400	△ 14,600	火 災 保 險		357,850	357,850
山 岳 告 料	135,000	135,892	892	事 業 費	2,423,000	2,346,123	△ 76,872
山 岳 告 料		100,300	100,300	會 交 費	50,000	32,699	△ 17,301
山 岳 告 料		240,844	240,844	會 交 費	40,000	55,020	15,020
				會 交 費	120,000	36,022	△ 83,978
				會 交 費	270,000	325,016	55,016
				會 交 費	700,000	1,274,832	574,832
				會 交 費	60,000	47,500	△ 12,500
				會 交 費	40,000	27,340	△ 12,660
				會 交 費	100,000	15,000	△ 85,000
				會 交 費	90,000	59,078	△ 40,928
				會 交 費	30,000	38,585	8,585
				會 交 費	341,000	0	△ 341,000
				會 交 費	100,000	100,000	0
				會 交 費	85,000	85,000	0
				會 交 費	397,000	250,031	△ 146,969
計	3,507,000	4,153,873	646,873	計	3,507,000	3,653,464	146,464
合 計	3,507,000	4,153,873	646,873	剩 余 金		500,409	
				合 計	3,507,000	4,153,873	646,873

社団法人日本山岳会 昭和 39 年度収支決算表及財産目録につき監査致しましたところ其の正確なことを承認致します。

昭和 40 年 3 月 31 日

会計監事 野口 末延

同上 松本熊次郎

財 産 目 録 (40.3.31) (単位円)		
基 本 財 産	金 額	備 考
貸 付 信 託	100,000	
運 用 財 産	金 額	備 考
建 什 器 備 物 品	1,000,000	上高地山荘
行 預 金	275,000	
銀 行 預 金	663,000	
振 替 預 金	2,097,300	
現 金	466,744	
保 証 金	98,810	
	111,616	
	2,750,000	無利息
小 計	7,463,470	
合 計	7,563,470	
基 金	金 額	備 考
遭 難 対 策 基 金	84,375	上記預金の内
図 書 基 金	11,450	"
図 書 室 基 金	213,400	"
合 計	309,225	

支部および支部長

東京 (石原憲治) 関西 (水野祥太郎) 越後 (藤島源太郎) 福島 (伊藤弥十郎) 石川 (磯野三郎) 信濃 (高山忠四朗) 富山 (中田勇吉) 山梨 (三井松男) 山陰 (織田収) 山形 (後藤幹次) 静岡 (牧野衛) 熊本 (三谷孝一) 福岡 (末松大助) 宮城 (北川正次) 秋田 (荒巻広政) 大分 (野口秋人) 東海 (石原国利)

昭和 40 年度収支予算表 (案) (単位円)			
収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
経 常 収 入	2,610,000	事 務 費	1,080,000
入 会 金	300,000	俸 給	400,000
入 会 費	2,310,000	文 具	20,000
		印 通	120,000
		交 通	30,000
		管 理 費	510,000
事 業 収 益	1,165,000	火 災 保 險	608,000
山 岳 告 料	200,000	火 災 保 險	12,000
山 岳 告 料	70,000	火 災 保 險	7,000
山 岳 告 料	550,000	火 災 保 險	3,000
山 岳 告 料	5,000	火 災 保 險	46,000
山 岳 告 料	70,000	火 災 保 險	80,000
山 岳 告 料	140,000	火 災 保 險	460,000
山 岳 告 料	130,000	事 業 費	2,087,000
		會 交 費	45,000
		會 交 費	40,000
		會 交 費	70,000
		會 交 費	400,000
		會 交 費	900,000
		會 交 費	50,000
		會 交 費	50,000
		會 交 費	50,000
		會 交 費	35,000
		會 交 費	232,000
		會 交 費	100,000
		會 交 費	35,000
合 計	3,775,000	合 計	3,775,000



辰沼広吉画

会務報告

四月理事・評議員会

一日・ルーム

△出席者 松方会長、三田、渡辺、副会長、理事折井、辰沼、田村、川上、松田、山崎、評議員藤島（敏）、日高、神谷、入沢、吉沢、加藤、織内、石原東京支部長、中田富山支部長、島越後支部長、東海支部、中世古、原、市川委員、委任出席、古沢

△議事と報告

①一九六五年度通常会員総会について

・期日 四月二十四日（土）午後三時より（東京支部会員総会）

・会場 本会ルーム
総会は午後二時より

・一九六五年度理事並びに監事、評議員（在任期間あるものその他）を左記の通り候補者を推薦した

・松方会長、三田、渡辺副会長、の他、理事深田久弥、辰沼広吉、皆川完一、川上隆、村木潤次郎、松田雄一、田村扇一、武藤晃、田辺寿（以上再任）

・加藤泰安、大塚博美、飯野亨、竹田寛次、住吉仙也、杉浦耀子、

川崎巖、宮下秀樹（以上新任）

監事野口未延（再任）

評議員折井健一（新任）の諸氏（現在の評議員は加藤泰安氏が理事に就任すれば退任することになるが其の他は不変）

尚、総会終了後、ルームで、有志懇談会（会費三百円程度）を開催する予定

②エヴェレスト登山計画について N.H.K.の後援決定、三月二十八日には事務所を開設し、募金関係の組織も作り、発足の段階に入ったが、三月二十日、ネパール政府筋の発表という事で「エヴェレストを含む登山許可を当分しない」とのニュースあり。外務省を通じて事情調査願うと共に板垣駐印大使にも直接、本会の既に正式な外交ルートに依り、ネパール政府の公式登山許可内諾を取付けてある事情を詳細説明して、ネパール政府への許可取付につき尽力方依頼することにした。

③第三回、海外登山技術研究会開催実施について

・期日 四月二十九日～五月二日

・場所 福島県新野地温泉

・参加資格 ①昭和四十年一月現在、具体的な海外登山計画を持つ各団体より一名 ②海外登山経験者等とする。

・主催 日本山岳協会開催実施責任者は日本山岳会として、全体責任者松方会長、企画責任者辰沼理事にて実施する。尚地元協力は福島支部長他が担当する。

④北アルプス山小屋友好会主催に

依る中部山岳国立公園三十周年記念行事について

・信濃支部長より来信あり、行事内容は

1 東京・名古屋・大阪で記念講演会 2 朝日新聞社後援

3 本会にも後援或いは協賛の依頼あり、本会としては行事の内容を詳細知った上で、決定回答したい。

⑤山岳五十九年、目下発送準備中

⑥台湾山岳協会に招待状を送付した。

・四月下旬或いは五月上旬には来日になる模様、尚韓国山岳会からも同様要請あり。諒承した。

⑦東海支部、ヒマラヤ登山計画について

・マルカについてには許可取付の可能性が薄いので、南米、アコンカグアなどを考えているが、今年中には出発したい。

四月臨時理事・評議員会 十五日・ルーム

△出席者 松方会長三田、渡辺副会長、理事折井、川上、山崎、深田、辰沼、田村、村木、松田、評議員日高、吉沢、加藤、交野、藤井、小原、織内、登山技術委員

・大塚、宮下、相沢、芳野

△議事

①海外登山技術研究会実施について

てを一任するという諒承の上で実行委員会を作り実務を行って来たが、事務手続の上で、協会と本会の間に誤解を生じたため協会より訂正文書が発送されたことはまことに遺憾なことであった。

しかし双方話し合いの上諒解をみたので計画通り実施をすることにした。

②東海支部、海外登山計画変更について

マカールの登山許可取付困難により、南米（アコンカグア）に変更について諒承した。

③福田弘年氏（立教大学講師）日ソ協会の推薦でソ連へ出張に付、ソ連関係に本会より推薦状発行のこと承認した。

④フランス国際登山技術講習会について

・二名招待の通知あり、人選はエヴェレスト委員会に一任する。

⑤韓国山岳会招待について

・韓国山岳会より招待方依頼あり、承認した。以上

東京支部報告 四月七日（水）役員会

一、新年度役員決定（十二頁総会記事参照）

二、新年度事業計画について

三、新年度予算について

四、監事 折井健一、安彦六郎

ルーム来室者名簿から（三）

二二九、二三〇号に掲載した集計のつきを報告する。ルーム移転（三九、七）に伴ない一時的に来室者数は減少したが、その後増加しているのは喜ばしい。集会で一時に多数来室したときは署名がなされないことが多い。

昭和 40 年 (1965)

1月 102
2月 87
3月 164
4月 168
5月 168
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
合計

昭和 39 年 (1964)

1月 147
2月 208
3月 188
4月 218
5月 265
6月 267
7月 127
8月 118
9月 130
10月 179
11月 142
12月 111
合計 2,100

昭和 39 年

○二月三日 テンジン・ノルゲイ氏
○五月十六日 韓国登山隊崔植隊長
○六月十七日 ビールバーティ
○七月十二日 新ルームに移転
○八月十九日 新ルーム披露パーティ
一三四人、ニマ・ノルブ娘

二三八号訂正 「東海山岳」

9頁3段 創行に思う 誤 正 創刊に思う

編集後記

☆三十五年八月から五年間、拙い編集と漫性発行遅延とで会員皆さんにごめいわくをおかけしてきましたが、やっと交替させて貰うことになりました。その間、貴重な原稿を頂戴した多くの方々、編集を手伝って下さった方、助言を与えて下さった方、一々お名前をあげませんがお礼を申し上げます。また私のような素人の無理な注文に対し、いつもお骨折をいただいた印刷所の技報室の係の方にも感謝いたします。申上げるまでもなく会報は、会と会員と

七、講習会について
出席者

石原、沼倉、関口、芳野、西丸、
野萩、小味、君島、鈴木（郭）、
中、広谷、松永、村井田、鈴木
（和）、倉知、山口、富田、十七名

追悼

住 広 造 氏

高山市在住の古い会員住氏は昭和三年二月一日午後逝去された。氏は明治四十二年四月本会（入会（会員番号一九三）五十六年の長い年月会籍にあった。

明治十三年八月二日誕生。岐阜県立聖太中学校を中退後、明治三十二年書籍雑誌、教科書、楽器類の取次販賣業を始め、大正八年一月からは活版印刷所を創立、昭和三年六月株式会社組織に変更、逝去迄その取締役社長として経営にあたった。

乗鞍岳、槍ヶ岳、穂高岳、御岳、白馬岳、立山等日本アルプスの諸山をカメラをかついで踏破し、撮影した写真をもとに絵ハガキを刊行発売し（約三百余種）、アルプス及び飛騨地方の紹介に尽した。また著書に「乗鞍山上十日日誌」がある。

氏の印刷会社で刊行された主なるものは、飛州志、飛騨山川、飛騨道乗合府、飛騨後風土紀、飛騨国中案内、飛騨編年史要、運材図会、月刊「飛騨史」、飛騨案内、飛騨の白川村、大野郡史、飛騨史料、居張一宮市史、朝日村誌、久々野町史、上宝用水誌、国府村史、きょうの飛騨史、丹生川村史、萩原町誌、村山遺跡、等で郷土の歴史、地誌の刊行に犠牲的出版を行った。氏を御存知の古い会員も今では少なくなつたと思うが、誰方から追悼記の寄せられることを望みたい。

（望月達夫）

山口国俊氏

山口氏（会員番号二七一八）は明治二十五年四月二十五日、兵庫県洲本町紺屋町に生まれ、幼少にして父を亡い、十六才で上京、独学、銀座玄海堂（画筆の老舗）の店員となつた。大正五年、日本橋に杏下専門店を開業。昭和二年、世界日報学校大会に日本代表としてロサンゼルスに赴いた。

この外遊によつて視野を世界に広め、日本の工業立国を深く信ずるに至り、後、本所錦糸町に靴下製造工場を創業し今日に至つた。

趣味は旅行、登山、植物、絵画のほか芝金派の哥沢を余技とした。

以上は未亡人からのお手紙により要約した氏の略歴であるが、同氏は小集会その他の集会にきわめてよく出席され、われわれもその温容に接する機会が多かつた。ことに山草趣味のグルーブを結成することを熱心に提唱され、お茶の水当時の小集会では東大の本田正次博士を講師に招き、自ら司会役を買って出られたこともある。

昨年八月十九日新ルムの披露パーティに出席され、最後まで愉快に若い会員たちと夏の夜のひとときをすごされた。おそらくこれが来会の最後でもあつたらう。四十年一月十六日逝去。

（古沢肇）

を結ぶ大切な絆です。そのために会務報告はもとより会員通信欄はこれからもっともっと充実していきたいと思います。今後とも全国の会員各位の変わぬご支援をお願いいたします。

☆さて、今年の山は残雪が多く、雨の多い初夏でした。五月の連休には山の遭難者が六十人を越え、日ごろ登山に縁のない人までがおどろき、マスコミは一せいに、これを社会問題としてとり上げました。また五月中旬には、秩父笠取、雲取コースで某大学のワンダフル部の「死の行進」という事件がおきて世人を驚かせました。この事例はこの学校ばかりでなく、五月二十三日、本暮祭に行つた本会員が、甲州金山でも同様の例を目撃したそうです。

☆戦争を知らず、平和憲法のもとに民主教育をうけて育つた若者が、意外に生命を軽視し、人権を無視し、理性を欠き、暴力に對し盲従を強いたり強いられたりすることになら矛盾を感じない風潮には反省を要します。単調な平和ムードのなかにひそむ真空地帯とも言えるでしょう。

（F）

昭和四十年五月二十五日発行

東京都渋谷区神宮前二ノ三 外苑コーポ内

発行所 法団 日本山岳会

編集者 古沢肇

電話（総）六、五〇一、五

印刷所 株式会社 技報堂